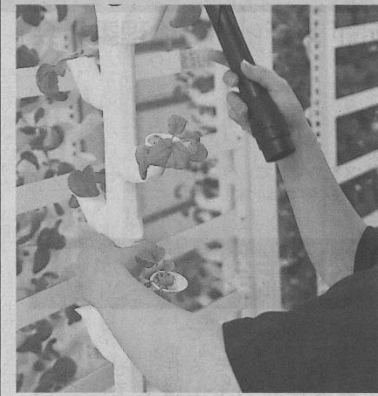


# 障害者に安定収入 ■企業の雇用率上昇

## 屋内型の貸農園 架け橋ビジネス

障害のある人が定着して働くことをめざす屋内型の貸農園「ソーシャルファームわくはびなす農園Plus横浜」が7月、横浜市都筑区にオープンした。障害者は安定した収入を得られ、障害者雇用に関心する企業にとっても法定雇用率を満たせる。そんなビジネスモデルを構築していく。

横浜・都筑区



貸農園ではチームごとに作業が行われている

運営するのは障害者の就職などを支援するエスプールプラス（東京都千代田区）。障害者雇用を希望する会社に農園の一部を貸し出し、さらに農園で働く障害者ら働き手の紹介も行う。「わくはびなす農園」は首都圏や東海エリアなど全国に30カ所以上あるが、県内では初めて。地上3階建ての屋内型農園で、広さは約2650平方メートル。最大129人まで受け入れることができる。

### 月収20万円

エスプールプラスによると、知的・精神障害者向けの仕事を提供することも企業にとって容易ではなく、それが原因で障害者側はやりがいを果たせず、離職率が高くなるなどの課題があるという。また横浜市の調査によると、将来への不安として、知的・精神障害

めざしているのは主に知的・精神障害者の雇用創出だ。厚生労働省によると、昨年6月1日時点で民間企業で雇用されている障害者約60万人のうち、約36万人が身体障害者。一方で、知的障害者は約14万人、精神障害者は約10万人にとどまっている。

業で雇用されている障害者約60万人のうち、約36万人が身体障害者。一方で、知的障害者は約14万人、精神障害者は約10万人にとどまっている。

者とともに「十分な収入があるか」を上位に上げており、十分な収入のある仕事とのマッチングが課題になっている。

そこでエスプールプラスは障害者雇用を望む企業に障害者を紹介し、企業が直接雇用した上で、貸農園に障害者の職場を作る事業を12年前から始めた。給与は最低賃金をベースに計算するため、フルで働けば手取りで月額20万円程度を受け取れるという。

横浜の農園はすでに12社に貸し出しており、99人の障害者が働いている。このうち知的・精神障害者が8割程度を占めているという。同社のこれまでの実績では定着率は9割以上と高い状態にあるという。

就労を希望する障害者は最長4日間の研修を受け、研修を終えた人で3人1組のチームを作る。エスプールプラスは、農園を借りる企業にチームを紹介する。農園を利用する市内の建設・介護会社の役員は「これまで障害者雇用はして

### 定着率9割

きたが、様々な障害の程度がある中で、仕事柄マッチングが難しい部分もあった」と課題を話す。「2000年乗りに越えていくを考えたい時に農園のことを知った。作れる野菜の種類も多く、色々な展開が考えられ夢がある」と話した。

20代の女性はこの会社が借りているスペースでミニ野菜を育てている。以前は横浜市内の別の農園でハーフを育てる仕事をしてきたが3年ほど退職していた。

「野菜を育てる仕事をしてみたい」との思いで農園での仕事を始めた。「種まきなど、みんなでチームとして働くのが楽しい」と話して「長期間働きたい」と今後の仕事にも意欲を示す。

エスプールプラスはチームごとに「農場長」と呼ばれるサポーターを1人付ける。20代女性のチームの農場長は40代女性。専業主婦だったが、子育てを終える仕事を始めた。障害のあるスタッフについて「当初は指示を受け動いていたが、今は「大きくなったね」と

### 感謝を力に

日々の野菜の成長を感じるなど仕事に取り組みの様子に変化が生じている。そういう様子を見ると心が元気になる」と笑顔を見せた。

収穫した野菜の扱いは企業ごとに異なるが、一般向けに販売するほか、社員への配布、社員食堂での利用など様々な活用方法があるという。野菜を育てる人から感謝されるのが障害者にとってはやりがいとなり、仕事の定着率も向上するという。

エスプールプラスの担当者は「横浜市は人口も多く、県内で需要はあると捉えている。地域に需要があれば農園の数を増やしていくことも想定している」と話す。（足立優心）